HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	対人コミュニケーションに関する体験学習のためのSimulated Clientの養成に関する研究 : 平成10年度報告書
Author(s)	大滝, 純司
Citation	高等教育ジャーナル, 6, 184-186
Issue Date	1999
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.6.184
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29753
Type	departmental bulletin paper
File Information	6_P184-186.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

対人コミュニケーションに関する体験学習のための Simulated Client の養成に関する研究 ―平成 10 年度報告書―

大滝　純司*

北海道大学医学部附属病院

A Research of Training "Simulated Client" as Educational Resource for Experiencing and Learning Communication Skills; A Report in 1998-1999 Fiscal Year

Junji Otaki**

Hokkaido University Medical Hospital

Abstract–Simulator is one of the most useful learning methods especially in the area of skills (psychomotor domain). In medical education, simulated patient / standardized patient (SP), a variety of simulator, has been developed and becoming popular as an effective resource for learning by experience and assessing skills and attitude (affective domain). Considering a lack of SP in Hokkaido, the author made a plan and started to develop "simulated client (SC)", which can be helpful for various professionals, including not only health professionals but others, to learn about skills and attitude in the communication with laypersons. After gathering and analyzing information about active SPs of other institutions, the author consulted with a citizens' group "COML(Consumer Organization for Medicine & Law); Sapporo Kanja Juku", and started a series of training with them.

(Received on February 14, 1999)

1. 背景

教育（学習）を行う上での教材の一種にシミュレーター simulator があり，宇宙船や飛行機など複雑な機械の操縦の訓練に用いられるものをはじめとして数多く利用されている。特に技能（教育学における教育目標分類 taxonomy of educational objectives, Bloom 1956 の用語でいえば精神・運動領域 psychomotor domain の能力）を学習するには，このシミュレーターが有用であると言われている。

医学教育や看護教育を含む医療専門職者の教育では，心肺蘇生法訓練用模型などに代表されるように，以前からシミュレーターが広く用いられている。シミュレーターといっても単なる模型だけではなく，患者そっくりの演技をし，かつ患者側から見た評価とそのフィードバックを行うことができるように訓練を受けた人（模擬患者 Simulated Patient あるいは標準模擬患者 Standardized Patient：略称SP）が，診察や

*）連絡先: 連絡先：060-8648 札幌市北区北 14 条西 5 丁目　北海道大学医学部付属病院
**）Correspondence: Medical Hospital, Hokkaido University, Sapporo 060-8648, JAPAN

面接 interview を学ぶ上での効果的なシミュレーターとして, 欧米では既に 30 年以上前から活躍している。ちなみに，括弧内の二つの名称のうち前者は体験学習で，後者は実技試験で用いられる設定を意味している。このような教材の開発が欧米で早くから進んだ背景には，能力の未熟な学生や研修者が本物の患者を練習台にしながら学ぶことが倫理的に問題になったことも関係していた（大滝，他 1996）。

日本での医療専門職者の教育においても，近年になり患者とのコミュニケーション能力習得の重要性が指摘される中で, このSPの有用性が注目を集め, 特に患者との面接について学ぶ場で多く利用されるようになってきている。SP が参加する体験学習は参加者に強い印象を与え, 技能面だけでなく, 態度（情意領域 affective domain, Krathwohl 1964）に関する学習効果も大きいことが知られている（大滝1995）。しかし, 本格的なSPの養成は決して容易ではない（大滝, 他1996）ためか, 北海道内で利用可能なSPはいない。旭川医科大学や一部の教育病院などが道外からSPを教育企画に招いているのが現状である。

北海道内に限ってもSPの需要は今後更に増加することが予想される。また，SP を「専門職者がコミュニケーションする相手を模擬的に演じ，更に評価やフィードバックもできるように訓練を受けた人」として拡大して捕らえなおすと，医療専門職者の教育に限らず，他の分野の教育でも幅広い応用が可能と思われる。本研究では, このような多様な専門職者のコミュニケーション教育において活用できる教育資源（模擬来談者 simulated client: 略称 SC と仮称）の開発を念頭に置いている。北大でこのような教育資源が確保されれば，医系のみならず多くの学部で活用可能となるだけでなく，全道の様々な教育担当者から広く注目を集め，更なる需要が喚起されると予想される。

なお, 研究を始めるに当たって, SC（SP も含む, 以下本論文の中ではSCで統一）の活動にかかわる用語について，一言触れておかなければならない点がある。

欧米の資料を見る限り "utilization", "use", "training" などの言葉がSCを目的語として使われている。しかし，日本ではSC を目的語として「利用」「使う」「養成」などの言葉を用いることに対して, 批判的な意見が散見される。それは, 家父長的な医師－患者関係に対する批判などから出たものであり，大切な指摘ではあるが，代わりとなる適切な言葉が無いことも事実であり，ここではこの批判に配慮しながら必要に応じてこれらの語句を用いていく。

2. 目的

平成１０年度の目標は, 北海道でのSC養成について, その可能性を検討し, 試験的な養成を開始することに置いた。

3. 対象と方法

以下の内容で研究活動を計画した。

(1) SC 候補者の選考： 先行して活動している他施設でのSC の人材確保の方法について情報を収集し，当大学で可能な方法を検討し，候補者を選定する。
(2) SC 候補者との協議：本研究の趣旨に基づいて，活動体制や年次計画についてSC 候補者と話し合う。
(3) 訓練開始：協議の後に，演技などの練習を開始する。練習用の基礎資料やビデオなどの機材は，著者が過去の研究を元に提供する。
(4) 次年度の研究計画作成：本年度の研究活動を総括した上で，次年度に向けて，研究計画を立てる。

4. 結果

(1) SC 候補者の選考：先行して活動している他施設では，元（あるいは現）患者のボランティア（K医大），教員の知人（H医大），医療に関心のある市民団体（O市周辺で活動），演劇関係学生のアルバイト（U大学医学部），演劇団体（学生のサークル活動も含む）（T大学医学部，T医大），附属病院ボランティア（K大学医学部），などが人材の供給源となっていた。養成活動や教育企画に関わる事務管理的作業については，教員や教育施設側が中心になって担当している場合と，主としてSPの側が組織的に担当している場合との, 二通りがあった。上記のいずれの方法を用いても当大学で人材の確保は可能であると考えられた。しかし，将来的に学外へ活動の場が拡大した場合に事務管理的作業を教員や大学側が中心になって担当

することは困難になると予想されたため，SC側が主体的に事務管理的な作業まで関わることのできる市民団体が，最も適切と判断した。

(2) SC候補者との協議: 医療と法の消費者組織として活動している“ COML(Consumer Organization for Medicine & Law)札幌患者塾 ”がSP活動に関心を持っていることを知り，旭川医科大学でのSP参加による授業の合同見学なども含めて，計５回の会合を持ち，本研究の趣旨説明，活動体制，具体的な活動計画について協議した。その結果，COMLは本研究活動の趣旨(専門職者のコミュニケーション能力の教育に資する)を理解し本研究に積極的に協力すること，当初は医系教育でのSC活動を目指して練習を開始すること，将来的にはCOMLのSC活動の事務管理的な作業はCOMLが中心になって担当することを目指すこと，互いに協力が困難な場面では別個に活動する（例えばCOMLで人材が確保できない場合は著者が別途SCを養成するなど）こと，などが合意された。

(3) 訓練開始：平成10年12月から，４人のSC候補者と著者で月に１回（３時間程度）の練習を開始した。

(4) 次年度の研究計画作成： 現行の４人に更に数人のSCを加え，事例数としては10例程度を用意し，医系を中心に各種教育企画への協力を開始する。同時に新たなSCの養成，事例の開発，事務管理的な機能の整備などを進める。

5. 考察

初年度としては，どうにか順調な滑り出しだったと考えている。研究担当者である著者が医学部附属病院の教員であること，COMLも主として医療問題に関心を持つ市民団体であることなどから，当面は医系教育での活動が中心になると予想されるが，次第に他の学部や分野での活動も模索していく予定である。今後活動が拡大するに連れて，事務管理機能や，資金確保など，活動を支えるための更なる体制づくりも課題になる。

引用文献

大滝純司，他 (1996),「教育資源としての模擬患者の養成と利用の普及に関する研究」,『平成６・７年度文部省科学研究補助金 総合研究(Ａ)研究成果報告書』

大滝純司 (1995),「模擬患者(SP)によるコミュニケーション教育の有用性」『JIM』**5**, 812-817

Bloom, B. S. et al. (ed.)(1956), "Taxonomy of educational objectives: the classification of educational goals, Handbook 1. Cognitive Domain" New York, Mckay

Krathwohl, D.R. et al. (1964), "Taxonomy of educational objectives: the classification of educational goals, Handbook 2. Affective Domain" New York, Mckay